

特色ある学校

SELHi (スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール) の指定について ー工業高校における英語教育ー

愛媛県立松山工業高等学校 河野 極

1. はじめに

現在、社会のグローバル化が進展する中、国際社会で生き抜いていくために必要な英語の力を身に付けさせるため、英語教育の在り方や指導方法の見直しが急務となっている。しかし、普通科高校においては大学受験科目の一つとして、ややもするとその目的が点数を上げることに偏り、本来の言語習得の目的つまり「習得した言語を、将来さまざまな場面においてコミュニケーションの手段として用いる」といったことが忘れ去られがちである。一方専門高校では、教育課程において専門科目に比べ、英語科に充てるための履修単位数に限界があり、ここでも本来の言語習得のための指導が十分できていないのが現状である。

しかし、今日の情報化社会においては情報技術のエキスパートの養成が叫ばれ、それに伴い、「英語」のコミュニケーション能力を身に付けた人材育成が重要視されてきている。まさに実業界では、このような両方の資質を備えた

人材を早急に確保しなければ、世界的に展開する経済競争に遅れをとってしまうといった危機感を持ちはじめている。このような社会的要求を反映し、本校の情報技術科に入学してくる生徒たちは、この「情報技術」の分野に強い興味・関心を示し、将来IT産業にかかわっていきたいという希望を持つ者が多い。そこで、松山工業高等学校の英語科では、本校専門学科、特に情報技術科に対する社会的ニーズにこたえるために、生徒の資質向上に

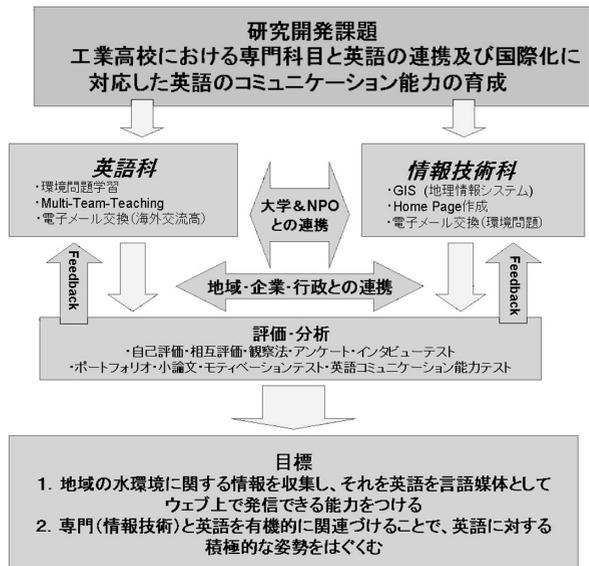


図1 本校SELHiのイメージ図

寄与するための英語教育の変革を図るべく、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールに応募した。このプロジェクトは、英語教育を重点的に実施することによって、英語教育の改善を図ることを目的とした研究実践を行う高校のことを指し、文部科学省の指定により、平成14年度から研究が開始された。研究期間を3年間とし、現在までに全国88校の高校が指定を受けている。本校では、研究開発課題を「工業高校における専門科目と英語の連携及び国際化に対応した英語のコミュニケーション能力の育成」とし、平成16年度から、本研究開発プロジェクトを推進してきた。

2. 本校の課題

本校に入学してくる生徒たちの英語学習に対する姿勢は、決して積極的なものとは言えない。その理由の一つとして、生徒たちの中に英語学習の意義が十分浸透していないことが挙げられる。また、生徒たちの多くは英語の基礎が定着していないため、発展的な英語学習に結びつけることが困難なことも挙げられる。情報化社会において、将来さまざまな場面で英語を使ってコミュニケーションをとらなければならない状況に遭遇することは十分に考えられることであり、生徒たちの英語学習に対する動機付けを行うためには、まず英語学習の意義を浸透させ、英語の基礎・基本を定着させることが大切になってくる。本県では、中学校における実践的コミュニケーション重視の英語教育と、高校における大学受験を意識した英語教育との間に大きなギャップがあるため、時として生徒たちが高校入学後に全く異なる英語の授業形態に戸惑ってしまうことが多々ある。本校においても日々の授業は座学的な要素が強く、生徒たちの英語学習に対する姿勢はややもすると受け身に

なってしまうがちである。3単位という限られた単位数の中で生徒たちの学習意欲や積極性を引き出すには、英語の指導方法の根本的な改善を考えていかなければならない。現在早急に見直さなければならない重要なテーマは、基礎・基本の定着を目標とした綿密なシラバスの作成、その中で展開される具体的な英語の授業形態の研究、さらに、学習内容が教科書のみに限定されてしまうことのないよう、グローバルエデュケーションの観点からの指導の在り方、そして専門学科と英語科とを融合するような英語教育の在り方であると考えている。

3. 現在までの取り組み

平成16年度1学期は、生徒の英語運用能力に合わせ、さまざまなインタラクションを用いた活発な授業のあり方と、コンピュータを活用した「調べ学習」を学習活動に導入し、情報技術科としての技能である情報収集及びそのまとめ方などを意識した指導の研究を行ってきた。また、愛媛大学の協力により、ホームページ作成の指導、さらにNPO（水域生態系保全協会）の協力で、石手川の水生生物を調査するフィールドワークに出かけるなど、外部団体との連携を密にし、自然環境教育を意識した教育活動を推進してきた。

2学期には、夏休みに各生徒が課題として



写1 石手川でのフィールドワーク



写2 ホームページ作成講習



写3 水環境のプレゼンテーション

調べた水環境について、班ごとにまとめさせ、パワーポイントを用いてプレゼンテーションをさせた。一方、英語の授業の方では、新たにALTが加わり、英語科教員6名によるMulti-Team-Teachingをスタートさせた。さらに教材の絞り込みをし、現在はウェブ上で探した「Water Cycle」や「Aquatic Life」に関する教材を用いて、できるだけ多くの時間英語に触れさせるため、英語を使った授業にも取り組んでいる。このような過程を経て、現在まで英語コミュニケーション能力の育成と、情報技術科としての専門性を生かした活動を連動させてきている。

3学期には、平成17年度にスタートするフルブライトメモリアル基金のMaster Teacher Programによる「共同企画課題(Pair Project)」で使用する予定のソフト、GIS (Geographic Information System: 地理情報システム)の使



What is GIS?, PDF slide show, (1.89 MB)
Geography

Simply put, a GIS combines layers of information about a place to give you a better understanding of that place. What layers of information you combine depends on your purpose—finding the best location for a new store, analyzing environmental damage, viewing similar crimes in a city to detect a pattern, and so on.

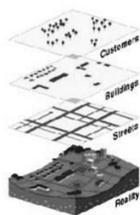
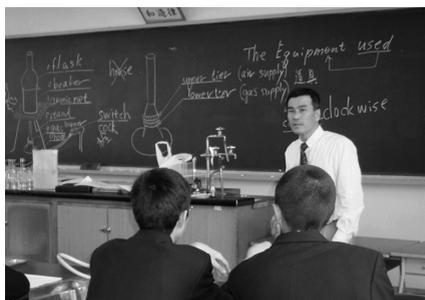


図2 GISイメージ図



写4 Water Cycleの実験

い方を愛媛大学に依頼し、講習会を2日かけて行った。今後はこのソフトを用いて、石手川の水環境のデータを英語で蓄積させ、本校のホームページとリンクさせ、ウェブ上に情報発信していく予定である。

4. 平成16年度の研究開発の反省とまとめ

2学期後半から、教材の絞り込みや、Multi-Team-Teachingでの教員一人ひとりの授業へのかかわりがスムーズにいきはじめた。しかし、週2回の早朝補習(進学補習は別に週1時間を確保している。)は実施してはいるものの、週3時間の授業時間以外で英語の授業時間を確保するための工夫がまだ十分とは言えない。今後は、例えばホームルーム活動や情報技術科の専門科目との連動、放課後の時

間の活用、また、課題研究との連携など、改善の余地が残っている。また、昨年度は3時間の英語の授業のうち、コンピュータを利用した授業のために2時間続きの授業を設定したが、生徒たちの集中力には限界があり、やはり1時間ずつを一週間の中で分けた方が効率的に授業ができるとの意見が多く、さらに専門科目や普通科目との連携なども考慮した時間割を考える必要があるなどの課題が残っている。

平成17年度からは、前述のオハイオ州キャンントン市にあるマッキンリー高等学校とのMaster Teacher Programによる「共同企画課題(Pair Project)」に参加することになった。インターネットを使い、必要な情報を英語で収集したり、共同研究を行うパートナー校との情報交換では、リーディング・ライティング能力が必要となってくる。昨年度の研究開発の実施によって明らかになった課題を参考にし、今まで以上に効率的な指導法を研究していく予定である。

さらに、我々英語科教員の中での指導法や、取り組み姿勢などの変化も、自己評価・相互評価、アンケートなどを通してティーチャー・ポートフォリオ・アセスメントとして蓄積し、それらを分析することによって、さらに充実した効率のよい教員間の協力体制や授業形態・指導法などを研究・工夫していく必要性も出てきている。

今後は、昨年度行ってきた評価の内容や反省点を分析し、その結果を十分に年間のシラバス作成に活かし、目標をしっかりと絞って、弱い分野の補強のための取り組みを考えていく必要がある。また、評価方法に関しても既成のものばかりに頼らず、本校独自の評価法の研究開発にも取り組んでいくつもりである。

5. 地域に対する影響

大学との連携で取り組んでいく研究が、将来どのような形で地域社会にフィードバックされていくかをとらえておきたい。この取り組みは「愛媛大学沿岸環境科学研究センター」が取り組んでいる「重信川流域環境研究計画」の研究チームと「NPO水域生態系保全協会」の連携で取り組んでいるプロジェクトの一部に参加するもので、現在「松山市公営企業局」(生活水資源)、「国土交通省松山工事事務所」(重信川自然再生事業)などの行政機関との連携が計画されている。そこで、松山工業高校においてはこのプロジェクトのホームページを開設し、研究状況や活動状況をよりわかりやすい形で情報発信することにより、行政・研究機関と住民との間の水資源問題に対する相互理解の橋渡しとしての機能を持たせたいと思う。さらに、松山市における一連の水環境活動を世界に発信することによって、シンクタンクとしての大学と行政、そして企業や地域が連携した環境活動の在り方を考えていきたい。

現在、工業高校における「ものづくり教育」の重要性が叫ばれる中、近年の社会のグローバル化を受けて、英語教育についてもその重要性が高まってきているところである。松山市においても、松山工業高校の地域に対する貢献度は非常に高いものがある。近年、専門教科のみならず、英語のコミュニケーション能力を備えた人材の育成が必要であるといった意見が寄せられるなど、外部からの英語教育の充実を要請する声が高まってきている。国際社会で生き抜いていくために必要な「道具」としての英語を、どのように身に付け、ものを「つくる」ためにどのように活用していくかが、今後の工業高校の英語教育の重要な課題となるだろう。